

## ブラジルのプロテスタント教会

ブラジルでプロテスタントの信仰が実践されるようになったのは、19世紀に移住したドイツ移民によってである。とはいえ、世界遺産として知られるようになったオリンダが1630年から1654年までオランダの植民地になった時、そこではカルヴァン派が活躍していたし、カトリックが国教として君臨していた。19世紀のリオデジャネイロで1810年には英国国教会に集会の自由が認められた。それは当時リオがブラジル最大の貿易港となっており、イギリスと交易を有利に導こうとした政治的圧力による。ドイツ人のプロテスタント教会では、1823年頃にリオデジャネイロ州のノヴァ・フリブルゴとリオグランデドスール州のサンレオポルドにチャペルが建てられた。そして、1886年にリオグランデドスール州にブラジル・ドイツ福音教会 (Igreja Evangélica Alemanha do Brasil) ができ、ようやくドイツ移民と本国のルーテル派が教団レベルでつながるようになった。

さて、ブラジル地理統計院 (IBGE) の調査によるとブラジルのプロテスタント人口の割合は、1890年には全国比で1.0%だったが、1940年2.6%、1950年3.3%、1970年5.2%、1980年6.6%というように微増してきていた。それ以降急速に拡大して2010年には22.2%になった。世界一のカトリック信者人口を擁するブラジルで、21世紀初頭にみるプロテスタント教会の進展は爆発的ともいえるが、そのような増加を導いたのがペンテコステ派の教会だった。90年代にはそれらの会派がプロテスタント教会全体の70%を占めるようになったとみられている。従来の特定の人種に限られたエスニック的なプロテスタント教会と異なり、これからのブラジルのプロテスタント教会を方向付けているといっても過言ではない。そこで、以下ではプロテスタント系ペンテコステ派教会の歴史を概説したい。

## プロテスタント系ペンテコステ派教会

**第1期:** 20世紀初頭にアメリカで生まれたペンテコスタリズムはブラジルにも伝えられ、1910年にサンパウロ州でコングレガソン・クリスタン・ド・ブラジル (Congregação Cristã do Brasil)、1911年にパラ州でアセンブレイア・デ・デウス (Assembléia de Deus) が生まれている。このうち、アセンブレイアは分派を生みながらブラジル全土に広がって、プロテスタント教会で最大の信者数を擁している。

アセンブレイアは、スイス人の二人のバプティスト派宣教師ダニエル・ベルグ (Daniel Berg) とグンナー・ヴィングレン (Gunner Vingren) によって始められた。彼らはアメリカからブラジル北部に派遣され、アマゾン川の河口にあるペレン市で宣教を開始した。二人はバプティスト派の教会で活動を行っていたが、その女性信者が異言を語り出すようになり、多くの信者がそうしたペンテコステの体験を求めようになった。二人の宣教師は教義上の問題から退会を命じられ、アセンブレイアを一つの会派として独立させることになった。

**第2期:** 都市化が進展した1950～60年代にかけて、プロテスタント系ペンテコステ派教会では細分化がみられた。人口流動が教会組織の解体と再編を導いたのである。1956年にブラジル・パラ・クリスト (Brasil para Cristo) がサンパウロ

でコングレガソンから独立したほか、デウス・エ・アモール (Deus é Amor、1962年)、イグレジャ・エヴァンジェリカ・ペンテコスタル・クリスタン (Igreja Evangélica Pentecostal Cristã、1956年)、イグレジャ・ダ・ノッサ・ヴィダ (Igreja da Nossa Vida、1960年)、イグレジャ・カザ・ダ・ベンソン (Igreja Casa da Bênção、1964年) などがある。

**第3期:** 1970～80年代にはそれまでとは異なる展開を示す教団が生まれている。目覚ましい信者数の拡大と布教路線の国際化を果たす一方、社会的に軋轢を生んで非難されることの多い教団が目立つようになった。1990年以降、急速に信者を獲得して大教団化した。神の名において諸悪の根源となる悪霊を退散させ、献金することにより豊かになれるとの「繁栄の神学」を説く。ユニバーサル教会 (Igreja Universal do Reino de Deus、1977年)、神の恵み国際協会 (Igreja Internacional da Graça de Deus、1980年) がその代表格だったが、近年ではムンジアル教会 (Igreja Mundial do Poder de Deus、1998年) の勢いが目覚ましい。これらはネオペンテコスタリズムとも呼ばれている。

## ペンテコステ派諸教会の特徴

人類学者オロは、ブラジルのプロテスタント系ペンテコステ派教会の一般的な特徴を次のように説明する。第一に、低所得者層の割合が多い。失業率は高く、識字率は低くて、臨時収入に頼っている者の割合が国内の平均値よりも高い。第二に、他宗教にたいして不寛容な態度を示す。牧師の説教では、カトリックをはじめ特にアフロブラジリアン宗教を攻撃する。特に第三期の教団に特徴的なのは、悪魔払いの対象となる「悪魔」はアフロブラジリアン宗教で信じられている様々な憑依霊で、それが苦難の原因となっているという災因論を説くことである。第三に、感情表現を露わにすること。オロは、ペンテコステ派を「貧者の感情表出」(a emoção dos pobres) と表現する。

感情表現が露わであることは第二の特徴である他宗教への不寛容とも関連している。特にネオペンテコスタリズムでは苦しみの原因が憑依霊にあるとして、信者のアフロブラジリアン宗教への反感を煽っている。また、集会場がどんなに小さくても音響装置が用いられ、牧師や説教師の語りに効果的な音響を用いて会場のムードが作られる。キリストの慈悲や愛が語られるときには、静かな音楽によって落ちついた空間が演出され、悪魔払いが始まると音楽はストップして牧師の声がボリュームいっぱい上げられる。牧師は「アーメン」「ハレルヤ」「神のおかげ」といった言葉で信者と応答する。集会場内の人々は一体化し、感情表出がさらにしやすい雰囲気が生みだされている。

以上三つの特徴をペンテコステ派諸教会の共通点として挙げるができるが、異なる点も見いだされる。それは、「世俗内禁欲」にたいする態度である。いわゆる伝統的なプロテスタント教会や、第一期、第二期の教会では、快楽、欲望、娯楽などの世俗的価値は回避すべきであると説いている。しかし、第三期の教会では肯定的にとらえられ、女性には美しく着飾ることも奨励し、レジャーや娯楽にたいする禁欲も説かない。また、選ばれたものだけが天国に行くことができるという信仰とそれを獲得するための禁欲主義は切り捨てられ、現世救済が強調されている。